第６類

大学における地域子育て支援

—しゅくたん広場での実践—

井上千晶・番匠明美・三木麻子

INOUE Chiaki・BANSHO Akemi・MIKI Asako

本論文は、夙川学院短期大学における子育て支援ルーム「しゅくたん広場」開室から約１年半の取り組みについて報告するものである。これまでの実践から、西宮市地域子育てセンター事業の一環として開室した本学の広場は、主に２歳までの子どもとその親が安心できる居場所として、地域に根づいていることがわかった。その活動に関して、親の育ちを支える試みとし、まず月１～２回、様々な分野から講師を招き講座を開催していること、次に学内施設の利用者への開放と問題点について報告した。また、次世代を担う学生の学びとしての試みについては、ボランティア学生の活動や実習前指導の場として広場を活用している例から、日常では乳児と触れ合う機会の少ない学生が広場での体験を通して成長する様子が捉えられた。以上の利用状況を踏まえ、地域と大学においてしゅくたん広場が存在する意味が示唆された。個々の親子や家族のあり方を大切にした、本学における広場の活動の重要性を検討することが今後の課題となった。

ここでは本学での事例報告を行うことで、地域に根ざした大学における子育て支援の今後の実践と研究について検討するための基礎的資料としたい。

キーワード：地域子育て支援・親の育ち・学生の学び

1. はじめに

子育てほど社会の変化に大きな影響を受けるものはないといわれる。少子化が進み地域での人々の結びつきが希薄になった現代社会においては、昔から受け継がれてきた子育てにおける様々な知恵や工夫の伝承が難しくなりつつある。一方、大学は先進的かつ安定した視点を発信する「人を育てる場」となる必要があり、そのような大学が地域の人々に貢献や援助を行う重要性が増している。子育て支援は「家庭支援策」であり「社会」を育てることにつながる。そのため、地域に根ざした大学における子育て支援の持つ意義は大きい。

西宮市より大学と連携した子育て事業の提案を受けて、本学の子育て支援ルーム「しゅくたん広場」は新しい親と子の育ちを考える「地域のたまり場」の役割を目指し開室した。学内の「広場」周辺は学生、教職員の往来が頻繁で、キャンパス内で利用親子との交流も自然と深まる。親子は広場の利用を通して、大学という空間での様々な触れあいを日常的なこととして経験することができる。

ここでは広場の開室から約一年半行ってきた本学の取り組みについて報告し、今後の大学における子育て支援の実践に役立てていきたい。

2.「しゅくたん広場」の概要

「しゅくたん広場」は西宮市の少子化対策の一環として展開された西宮市地域子育て支援センター事業であり、平成20年に児童福祉法で法制化された地域子育て支援拠点事業「ひろば型」に位置づけられる。大学の持つ知的財産、人材や専門性を生かして地域の子育

て支援に取り組む、市と連携した子育て支援ルームである。空き教室81㎡を改修、別に子ども用トイレやシャワールームを設置し、平成21年10月にオープンした。月曜日から金曜日の9時30分から15時30分まで開室（12時から13時は閉室）。4名の保育アドバイザーが2名ずつ勤務する。

広場は主に0歳～3歳の子どもとその保護者が対象で、親子で子どもの発見する遊びを共に楽しむ場としている。開室中はいつ来ても、いつ帰っても自由で、子育て家庭の交流の場でもある。

市と連携した子育て支援事業で基本となる柱は、

①子育て中の親子の交流の場の提供と交流の促進

②子育て等に関する相談・援助の実施並びに関係機関へのコーディネート

③地域の子育て関連情報の提供

④子育て及び子育て支援に関する講習会の実施

の4本である。これを円滑に運営するために、保育アドバイザーが、親子への対応（施設利用の案内、親子の遊びの見守りや遊びの提供、他の親子との交流のきっかけつくりなど）や育児相談、毎月1回開かれる講座や行事の案内、ボランティア学生の指導など広場に関する業務を行っている。（井上）

3．利用状況から捉えられる傾向と問題

平成21年10月20日の開室より、平成23年2月末日までのしゅくたん広場利用総数はのべ7110名（開室304日間）となっている。月別に利用者数の推移を表したのが図1である。これを午前と午後に分け利用状況をグラフにしたものが図2である。開室から4ヶ月経った頃よりほぼ毎月400名以上の親子が利用するようになっている。そのなかで7月から10月の間は午前中の利用が他の月に比べ特に多くなっている。これは、今年度暑い時期が長く続いたため、屋内で自由に遊べる場所を求めて、比較的気温の低い午前中に利用者が集まったこと、また7月中旬から8月末までは週に3日、午前中に子ども用プールをしゅくたん広場前で解放し、水遊びの行事を開催した影響もあると思われる。

今年度4月以降では、1日の親子の利用者数は約26名となっている。空き教室一部屋を使用した広場では、2名の保育アドバイザーと親子が交流し、ゆったりとした“時”を共有していくために現在のこの利用数でちょうど良い空間を作り出している。

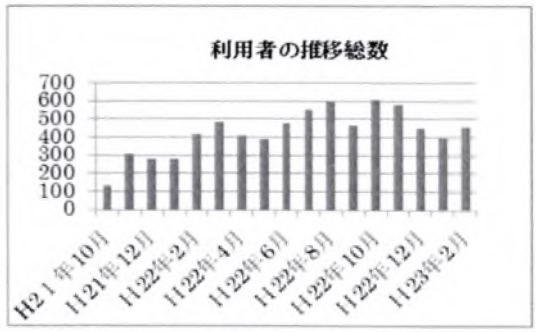

図1　利用者の推移総数

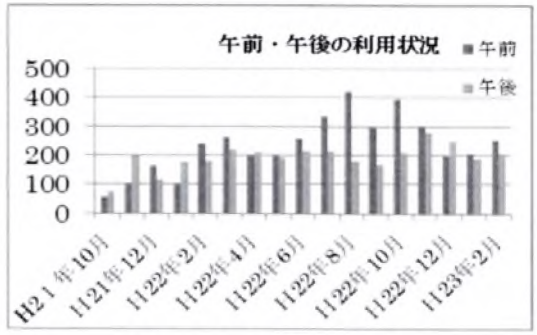

図2　午前・午後別利用者数

利用者の地域分布としては約70%が徒歩等で来室できる広場周辺地域に居住する親子で、しゅくたん広場が地域に根ざした拠点として位置づけられつつあることがわかる。一方で遠方からの利用者が約30%以上あり、支援を求める強さと大学における実践の意味を検討する必要性が感じられた。（図3）

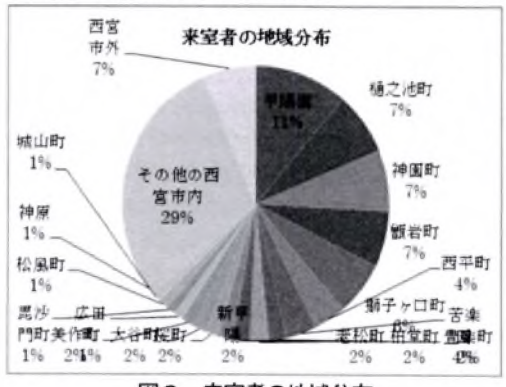

図3　来室者の地域分布

利用している子どもの年齢に関しては0歳代27%、1歳代49%、2歳代19%、3歳代4%、4歳以上が2%

となっている。乳児を育てる母親が家庭の外に何らかの結びつきを求めていることがわかる(図4)。

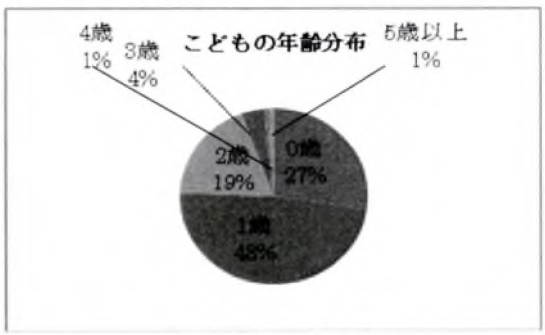

図4　子どもの年齢分布

利用頻度では月1～2回が81%、週1回が12%、週2～3回が6%、ほぼ毎日が1%である(図5)　。一週間に1回以上しゅくたん広場を利用している親子が約20%あり、しゅくたん広場が親子の居場所の1つとして生活の一場面に取り入れられていることが伺われる。また、家庭とは異質の“子育ての場”を親が求めていることが考えられる。

今後は、どのような親と子の育ちを目指していくのか、その方向性を明確にした上で、サービスという視点をこえて大学という場での特色ある子育て支援を検討していくことが必要となってくるであろう。

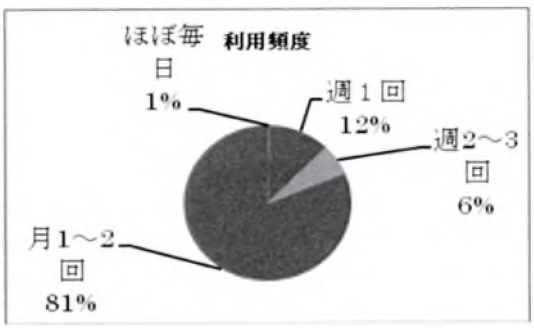

図5　利用頻度

4.　親の育ちを支える試み

(1) 講座

しゅくたん広場における子育て支援のベースには、“母親を元気にすることが子どもを健やかに育んでいくことに繋がる”という考え方がある。また、テキストに頼り、子育てに正解を求めて苦しむような問題に落ち込まないように、(母) 親達を支えていきたいと考えている。「家の中で一対一で子どもと向き合い一生懸命やろうとすればするほど、子どもと一緒にいることに息苦しさを感じるようになってしまった。」と、ある母親は自分の子育てを振り返っている。そこには、存在するはずのない“良い子育て”を求めてがんばる母親の姿がある。

①親が自ら考える力を育み、心と体で感じるものを大切にしながら自分の子育てに自信が持てるようにする。

② (母) 親の人としての育ちを考えるために新しい“窓”を提供する。

③孤立した子育てに落ち込まないように、自分らしさを認め合える仲間作りの機会を提供する。

以上の3点を主なねらいとして、様々な分野から講師を招き、講座を開催している。表1がこれまで実施してきた講座の一覧である。体験型と講義型、親のみと親子で参加できるタイプがある。本学では、参加者同士や講師とも充分に交流できるように10～20名程度の定員で設定している。

写真1　真剣な表情でタップを楽しむ受講者

講座「ワン・ツー・タップ　～タップで楽しもう」の参加者がタップダンス初体験の後、講師らと談笑していた折に「体の中が流れた感じがする」と未知の世界に触れた喜びを述べていた。受動的に聴講する形式よりも、親達と講師がテーマに向けて共に感じ考えるあり方で取り組むことにより、参加者は体験したことを自分の中のより深い所で感じ取っていくようである。親たちのこういった経験が、心の深まった関わりとなって子どもたちに伝わっていくのである。

表1 しゅくたん広場 講座一覧

年・月	開催日	講座名	講師名	具体的な講座内容	参加者		
					児童	保護者	合計
2009年10月	30日	子育て講座	保育アドバイザー	子育て相談	6	6	12
11月	25日	心を感じる講座	井上千晶 (児童教育学科・しゅくたん広場主任)	クリスマスリースを作る	0	7	7
12月	24日	心を感じる講座	倉掛妙子(児童教育学科)	音楽を楽しもう－様々な楽器に触れる－	12	12	24
2010年1月	27日	心を感じる講座	番匠明美(児童教育学科)	「私」と出会う－フェルトボールを作る－	0	9	9
2月	22日	心を感じる講座	森田健宏(児童教育学科)	親子でアロマ－好きな香りを作る	2	9	11
3月	11日	親子でふれあい講座	井上千晶・保育アドバイザー	親子体操・歌 本学学生製作おもちゃの体験	37	33	70
4月	26日	体を考える講座	岸本喜代子(本学非常勤講師)	オイルマッサージ	8	8	16
5月	19日	体を考える講座	黒江兼司(神戸徳洲会病院医師)	小児科の上手なかかり方	13	13	26
6月	2日	子育て講座	浜本直子 (絵本で子育てセンター講師)	絵本で子育て－読み聞かせで育まれる「絆」－	13	11	24
7月	5日	体を動かす講座	金築俊子(本学非常勤講師)	ワン・ツータップ ータップで楽しもう－	0	8	8
8月	3日	親子でふれあい講座	林有紀(児童教育学科)・井上千晶	ぬたくり遊びで楽しもう	10	10	20
8月	8日	＊家族で楽しむ講座	井上千晶・保育アドバイザー	ペットボトルで風鈴を作ろう！！	9	15	24
8月	22日	＊家族で楽しむ講座	井上千晶・保育アドバイザー	ペットボトルで風鈴を作ろう！！	7	12	19
9月	5日	＊家族で楽しむ講座	井上千晶・保育アドバイザー	オリジナル布かばんづくり	6	13	19
9月	17日	親子でふれあい講座	森美奈子(家政学科)	遊びを通して学べる食育	11	10	21
10月	13日	体を考える講座	岸本喜代子(本学非常勤講師)	予防接種について	0	3	3
11月	10日	体を考える講座	岸本喜代子(本学非常勤講師)	予防接種－② 冬に気をつけたい病気	9	9	18
11月	30日	心を感じる講座	井上千晶 (児童教育学科・しゅくたん広場主任)	クリスマスリースを作る	0	9	9
12月	8日	心を感じる講座	番匠明美(児童教育学科)	砂絵遊び	0	7	7
2011年1月	25日	親子でふれあい講座	井上千晶・保育アドバイザー	親子体操・歌 本学学生製作おもちゃの体験	31	30	61
2月	16日	子育て講座	早田由美子(児童教育学科)	モンテッソーリの子どもの見方を学ぶ	0	7	7
3月	15日	心を感じる講座	橋喬子(家政学科)	自分に合う色を見つけよう－パーソナルカラー－			
合計	22回				174	241	415

＊家族で楽しむ講座は、8月8日は保護者15名のうち、父7名・母8名、22日は12名のうち、父5名・母7名、9月5日は13名のうち、父4名・母9名が参加。
＊参加者の項のうち、児童数0名の講座は、母親のみ参加のもので、お子さんは保育アドバイザーがしゅくたん広場で保育した。
＊講座内容はhttp://www.shukugawa-c.ac.jp/department/?m=Hiroba 「News」で公開している。

筆者が行った「私と出会う～フェルトボール作り」の講座では、制作前から「これでちゃんとできるのか」と重ねて確認し、失敗をおそれる様子が参加者の間でしばしば見られた。上手な作品を作るよりも新しいことに挑戦する気持ち、楽しむ気持ちを大切にし、「まずはやってみましょう」「作品に失敗はないですよ」と励ましていく。思い通りに出来上がらなかった作品も、自分の手で作り上げてみると、それなりに自分らしい味わいがでていることに気がつかれることがある。思ったようにできなくても、意外と面白味がある。これまでとは少し異なる捉え方をしている自分に気づく。そういった適度な“よいかげんさ”を受け入れた時に親の心の中から生じてくるいきいきとした感覚が、子どもと向き合っていく気持ちにエネルギーを与えてくれる。

講座を受講して得たものが、参加者の生きている世界を今までとは少し違ったものへと変えていく。そのような触媒として働く刺激を講座を通して提供していきたいと考えている。 (番匠)

写真2「親子でふれあい遊び」の講座風景

(2) 大学施設の開放

本学では、しゅくたん広場に親子を受け入れるに際し、1号館受付前と12号館図書館入り口前に自転車やベビーカー置き場を設けた。また、1号館ホワイトホール(自動販売機やパン売場)、クリスタルホール、図書館、ミニコンビニ、学生食堂、実習食堂などの利用も可能とした。また、本学の立地を考え、学生の利用

表２　しゅくたん広場登録者の図書館利用状況

●登録・利用状況

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
2009年度	登録	--	--	--	--	--	--	2	8	9	7	12	10	48
	(うち更新)	(--)	(--)	(--)	(--)	(--)	(--)	(--)	(--)	(--)	(--)	(--)	(--)	(--)
	利用	--	--	--	--	--	--	2	16	15	22	37	51	143

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
2010年度	登録	34	9	11	8	9	3	15	12	4	2	4		111
	(うち更新)	(23)	(1)	(0)	(0)	(1)	(0)	(1)	(1)	(0)	(0)	(1)		(28)
	利用	48	41	58	49	54	48	69	86	43	50	64		610

●図書貸出冊数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
2009年度	--	--	--	--	--	--	8	61	36	79	152	160	496

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
2010年度	164	122	180	155	167	152	213	274	137	185	241		1990

を妨げない範囲で、学生の登学に使われるジャンボタクシーの利用も許可された。その利用状況や問題点について述べたい。

【1】図書館

本学図書館の約８万６千冊の蔵書のうち、絵本は約１万３千冊を占める。開架式書架の２階部分には、その絵本だけを別置した絵本コーナーを設け、しかけ絵本や布絵本、大型絵本や紙芝居の展示もされている。

また、２階アートギャラリーでは、学生の作品を鑑賞することができる。美術デザイン学科学生の作品展をはじめ、家政学科ファッション専攻学生の回顧展なども行われ、児童教育学科学生が制作した立体紙芝居や大型遊具などの作品も展示される。

このように、乳幼児やその保護者の世代にとっても魅力的な施設は、一部外部の方にも開放されているので、しゅくたん広場登録者（保護者）にも利用を可能にした。

外部利用者は、

・図書〈雑誌を除く〉貸出
（冊数：５冊　期間：１ヶ月）
・図書館資料の閲覧
・図書館資料の複写（有料）
・視聴覚資料の視聴
・データベース、インターネットによる情報検索

を利用することができる。

また、図書館の絵本のうち、複数登録のあるものの中から、50冊を保育アドバイザーが選定し、しゅくたん広場への貸し出しを行っている。しゅくたん広場利用者は、広場でゆっくり床やソファに座って絵本を読むこともできるし、図書館で絵本や一般図書の閲覧、貸し出し利用もできることになる。

しゅくたん広場登録者の図書館利用状況の一覧は上記（表２）のとおりである。

しゅくたん広場利用者（保護者）の月平均はのべ約200名、2009年10月から2011年２月までの図書館利用者の月平均は44名（2010年４月からでは55名）と２割から３割近い方が利用され、また貸し出し冊数も一度に３冊以上を利用している割合となり、図書館職員の方々のご協力のおかげで図書館が有効に利用されていることがわかる。

・問題点①

広場利用者の来室は不定期であり、利用が複数年におよぶこともある。またお子さんが成長して広場を利用する年齢を超える場合もある。あくまで、広場に来室している方に、図書館も利用してもらうにはどのようにすればよいかを図書館と事前に相談した。しゅくたん広場開室が2009年10月20日であったこともあり、しゅくたん広場での登録更新（住所などの確認）は、2010年からそれぞれのお子さんの誕生月に行うこととした。これで、年１度以上の来室が確認できるため、その広場登録カードと住所確認書類を以て、図書館利用を可能とすることとした。現在、一般利用者と同様に年度末（３月末）までの図書館カードが発行されている。

・問題点② 図書館での学生と子どもの共存

短期大学図書館は本来、学生および教職員のための施設であるので、公立図書館以上の静粛さを求めたい。その意味もあり、子どもだけの来館は禁止しており、あくまで保護者が学外利用者として許可される。しかし、乳幼児を置いて図書館に入館することも難しいため、保護者に連れられて入る子どもたちについては入館を制限していない。

そこで利用者側の意識も問題となる。図書選定や資料閲覧の際に、お子さんから目を離されるケースもあり、また乳幼児に静粛を求めることも難しい面がある。職員の注意を受け入れないわけではないが、静粛が長続きしない場合もあり、学生との共存が懸念される。

図書館では年に一度学生対象のアンケートを行っており、そこに今回（2010年９月24日～29日）、しゅくたん広場利用者を想定した項目を入れて、上記の問題を諮った。短期大学２回生および専攻科生の計231名を調査対象とした、質問項目「子ども連れでの利用について気になることはありますか」に対して、その結果は、

・気になることがある	22名	10%
ない	145名	63%
・子ども連れの利用者を見たことがない	30名	13%
・無回答	34名	15%

であった。学生の意識には今のところ、子どもたちの声がさほどうるさいとは映っていないことがわかり、勉学の妨げとなっていないことには、安堵する思いである。

しかし、アートギャラリーにおける幼児美術作品展では、遊具が展示されていたため、子どもたちがそれを使った遊びに夢中になってしまうということもあった。本来の作品展では子どもたちに実際に遊んでもらう展示であるが、アートギャラリーが図書館内であるためにこれも問題となった。

学生の制作した大型遊具は、しゅくたん広場に貸し出されることもあるので、保護者には、あくまで大学図書館を利用しているという自覚を強く持っていただきたいという他ない。

【２】学生食堂・実習調理食堂の利用

しゅくたん広場が、12時～13時を閉室しているため、お弁当などの食事をホールを利用して摂られる方もある。また、学生食堂を利用される場合も想定し、教職員から寄付されたものも併せて、各食堂に子ども用食事椅子を用意した。また、本学の家政科の大量調理実習は週に２回、学生や職員が利用して行われている。毎回バラティティに富んで栄養面に配慮された献立が安価で提供されるために、これを利用される方も多い。

・問題点

実習食堂は教員の管理の下に、学生が調理しているもので、あらかじめ食券を購入した数を調理するなどのルールがあり、食後の片付けも利用者が行うことが原則であるので、広場の利用者には利用しにくい面がある。工夫して子どもさんを待たせ、うまく食堂を利用されている方もいる反面、食べこぼした後片付けができない、自分たちの食事の間、子どもに目が行き届かないという保護者も見られた。

保育アドバイザーも昼休み時間ではあるが、食堂に様子を見に行くなど、家政学科の教員、学生や他の利用者に迷惑のないよう配慮している。子ども連れの母親を暖かく見守る学生や職員が多い中で、手助けを受けることが必要な場合は求め、またそれに甘えることなく自己管理することも保護者に望みたいことである。

学生への教育という意味では、いろいろな場で、自分たちとは違う立場の人々に配慮できる学生、違う立場の人々を受け入れる許容力のある学生が望ましい。広場利用者との出会いがそのきっかけになって、子ども連れの母親に手を貸すなどの心遣いができるようになってほしいと願うものである。

また、今の学生が将来母親となって、広場利用者のような立場に立った時に、悪い面は反面教師として周囲に配慮のできる保護者になってくれることも望みたい。 （三木）

５．次世代を担う学生の学びとしての試み

保育者を目指して入学してくる学生の多くは、それまでに子どもと身近に接する機会が少なく、保育の実習で乳幼児と初めて出会い関わり方に悩むという現状がある。また、人とのコミュニケーションがうまく取れず、必要以上に不安を抱いて実習前に「自分に保育者は向いていない」と諦めてしまったり、実習に行っても環境に適応できないという姿が見られる。そのような学生がしゅくたん広場で子ども達と出会うことにより少しでも幼い子どもと触れ合う機会を持てることは重要である。

また、保育者養成という見地とは別に親子の姿を通して、子どもを産み、育てるということはどういうこ

とか将来の育児についてのイメージを持つことができるのも副産物といえるだろう。

・ボランティア制度

学生の学びのためにボランティア制度を設けた。全学科の学生を対象にした説明会を開き、必ず説明会に参加した上で、ボランティア登録を行った学生が、日時を予約申し込みして広場に入ることができることとした。オープンキャンパスの説明会や新入生へのオリエンテーションでも広場への見学を組みこんで、学生が広場を知り、参加してゆく下地を作っている。

ボランティア経験を通して、

①子どもと関わり、子どものかわいさや一緒に過ごす楽しさや喜びを味わうと共に発達を知る。

②保育アドバイザーの姿を通して保護者との接し方や保育の方法、実際を知り保育の仕事のやりがいを学ぶ。

③来室する親子の姿から将来の子育てへのイメージを膨らませる。

④人と接することを通して多様な価値観を知る。

などを学んでくれることを目的としている。

次に、ボランティア経験や授業での広場活用の事例を２例あげる。

・事例１：

中学校教諭二種免許状取得のための実習（美術・栄養士コース学生）に臨むにあたり、事前指導の一環として利用した例。コミュニケーション能力を高めることを目的とし、２～３人のグループに分かれて３日間、広場を利用する親子との触れ合いや保育アドバイザーの仕事の手伝いをした。学生が自分で考えた絵本、おもちゃなどを用意して読み聞かせや遊びを行った。前もって利用する子どもの年齢や興味について調査し、おもちゃや絵本を手作りして来る姿も見られた。この経験を通して、緊張の中にも広場の親子に自分を受け入れてもらうという経験をし、子どものかわいさや、子どもと一緒に過ごす楽しさを知ることができた。そして同時に保育アドバイザーや保護者の姿から仕事としての保育や育児の様子を垣間見ることができ、多様な価値観を知る機会になった。

・事例２：

保育専攻科生が小児保健実習授業で学んだ身体計測を「広場」で実習した。授業時間２コマ×２回にわたり、５～６人のグループに分かれて授業担当の岸本喜代子先生指導のもと、身長、体重、胸囲、頭囲を測定した。結果はパーセンタイル曲線に記入しコメントと共に保護者に渡す。広場には　身体計測の実習を行うことを事前に掲示したが、市の乳児健診以外でこのような身体計測をするという機会がないので、保護者の関心が高く希望者が多かった。

授業では保育実習室で人形を使っての計測の方法を学んでいるが、広場での実習では、月齢、年齢の異なる乳幼児に対し、その姿にあった対応をしなくてはならない。学生はかなり戸惑った様子で保育アドバイザーも総出で応援しての計測となった。保育現場での実習とは違い、学校の中にある「広場」では学生達も安心感の中で実習ができる。授業担当の岸本先生をはじめ保育アドバイザーの的確な指導、子どもや保護者への対応の実際を目の当たりにし、学生たちは改めて保育の仕事へのイメージを膨らませることができたようだ。

この他にも、食育・食事マナーについての意識調査・ファッションショーでの子ども服製作モデル・遊具制作・音楽療育実習など、授業での活用が広がり全学的に「広場」が学生の学びの場として定着して来ている。

今後は学生がもっと「広場」の活用ができるように、今までの予約ボランティアに加えて、授業のちょっとした空き時間に保育アドバイザーの許可を得てボランティア活動が出来るようにしていく方向である。

（井上）

６．今後の課題

夫婦や世代間の問題は子育てに大きな影響を与える。現在、保護者の利用者はほとんどが母親である。父親が参加できるように、８月から９月にかけて日曜日に３回、講座を兼ね広場を開室した。その結果、家族で受講する参加者が増えた。その後夫婦の間でしゅくたん広場のイメージを共有し、コミュニケーションがとりやすくなったと報告してくれる母親もいた。

父親や祖父母が、母親とは異なる立場で子どもの育ちを支える存在となるように援助していきたい。

また、講座参加などを機会に親が自主的なサークルを立ち上げることを支援できる体制作りや、地域の次世代を担う小・中・高校生らが乳幼児と触れ合う機会を提供すること、親子の抱える問題をグループや個々の相談で取りあげていくことも今後の課題である。

親という役割に閉じこもらず、子育てをしつつ、自分の生き方を模索することを支えること。そしてなによりも、子どもにとって今何が本当に大切なのかを考

えることができる子育て支援。個々の親子、家族がどうありたいのかという問題に丁寧に向き合っていくことのできるしゅくたん広場らしい取り組みを具体化させることが必要である。 (番匠)

<付記>

・本稿は「全国保育士養成協議会第49回研究大会」(平成22年9月17日)において発表した内容をもとにしている。また、本稿は児童教育学科において、共同してしゅくたん広場開設と運営に携わる担当者が考察検討した結果を分担して執筆したものである。

・本学教職員の方々には開室準備の段階から運営の過程においてもあらゆる面でご協力戴いていることを感謝いたします。また、資料作成にあたっては保育アドバイザー、図書館職員の方々の協力を得たことを記して感謝いたします。

ピアスーパーバイザーからのコメント

本実践は、地域社会に開かれた実践であり、子育て中の親子の交流、相談、情報収集、そして、新たな学びを支えるものである。西欧では育児を楽しいと答える親が多いのに対して、日本では育児が否定的な回答する親が7割を占めるという調査がある。孤独な子育てになりがちな日本の現状の中で、子育て支援ルームは、親にとっては心安らぎ、また、自分を見つめなおし、さらには、わが子を客観的に捉えなおす機会となる。また、子どもにとっては母子中心の狭い人間関係から少し離れて、同年齢の子どもとの交流や保育士、学生、教職員など多様な人間と関わりをもつことができる貴重な場となる。

さらに、学生にとっても、乳幼児と触れ合う機会が極端に減少している中で、学内で日常的に親子の姿を見たり、授業やボランティアで親しく接したりするのは「自分たちとは違う立場の人々への配慮」をめざす上で得難い体験学習の機会となっている。

本実践では、短大の施設も有効活用されている。また、大学の特色ある講座も多数開かれている。約300日開室で7000人以上の利用者に加え、遠方からの利用も3割以上に上るのは関係者の様々な工夫と努力によるものである。「大学という場での特色ある支援」がさらに充実したものとなるよう今後の発展的な継続が強く望まれる。 (担当:児童教育学科 早田由美子)